

演劇的知とコミュニケーション -自らの教育活動を振り返る-

仙石桂子 ・ Gehrtz 三隅友子
四国学院大学 ・ 徳島大学国際センター

1. はじめに

人との関わりは全てコミュニケーション活動と言えるだろう。情報と感情を分かち合うコミュニケーション活動はあまりにも日常的で、ひとたび問題やまた何らかの支障が生じた時に、「コミュニケーションが不足していた」「円滑なコミュニケーションが求められている」といった表現でふり返りや改善がなされることが多いのも事実である。私たちが日々教室の内外で行なっている教育活動も、教員（職員）と学生とのコミュニケーションのあり方や質によってより大きい効果を生むというのも、自明のことだろう。学び手である学生に知識や技術を提供したり、あるいは深い思考へと向かわせたりする教育活動は、教え手と学び手の関係性の上に、コミュニケーション（情報と感情を分かち合う活動）を通して、互いが協力して積み上げていながら、すなわち共に学びながら成立すると考える。

2. 演劇的知とは

教育活動を一つのコミュニケーションとし、単なる知識のやりとりといった一面で捉えるのではなく（次ページ資料参照）、ことばに支えられる知識のみならず、演劇的知を使い学びを全身化しながら、たとえば教え手と学び手の関係性を構築することも大切だろう。

それは、アクティブラーニング、主体的に学生に学ばす、自律学習、高度なプレゼンテーションの技術等の言葉で表される今の教育に求められているものを、まず基本に戻って「演劇的知」の学びの三つのモード「1）コトバ2）身体（からだ）3）モノ」に気づくことが必要だろう。

3. 広く教育活動で演劇的知を取り入れる可能性

担当者ら（劇教育と異文化理解及び日本語教育の実践者が協力して実施）は、演劇的知を使った言語教育及び異文化理解教育、コミュニケーション教育を実践している。それぞれの教師の学習（学び）のねらいがあり、そこに辿り着くために演劇的知を導入しながら、共通（受講者と）の目標を確認し、さらに個別の目標を達成しているかを常に自らに問うている。またこれまでの実践を経て、受講者（日本人学生・留学生さらに一般社会人や看護師）からは、表現の手段としての「身体」「こえ」と「ことば」の関わりに気づき、表現する自分の可能性が広がったという評価を得ている。「知識やことば」とともに「身体とこえ」を確認することと、演劇的知を自らの実践になぜ、かつどのように取り入れるかを参加者とともに考えたい。本ワークショップは、インプロを使ったウォーミングアップの後、最後にはソシオドラマの手法を使って、参加者が新たに展開したいと考える教育活動を見える形にすることを試みる。さらに活動を振り返り、個人と全体で互いの発見をすり合わせることも行う。自身の専門に関する知識（知識を通じた価値観や人生観も含む）を、教育を通してさらに展開させるために、自らの気づきを高め、演劇的知を使った教育的コミュニケーションを体験することを目指す。

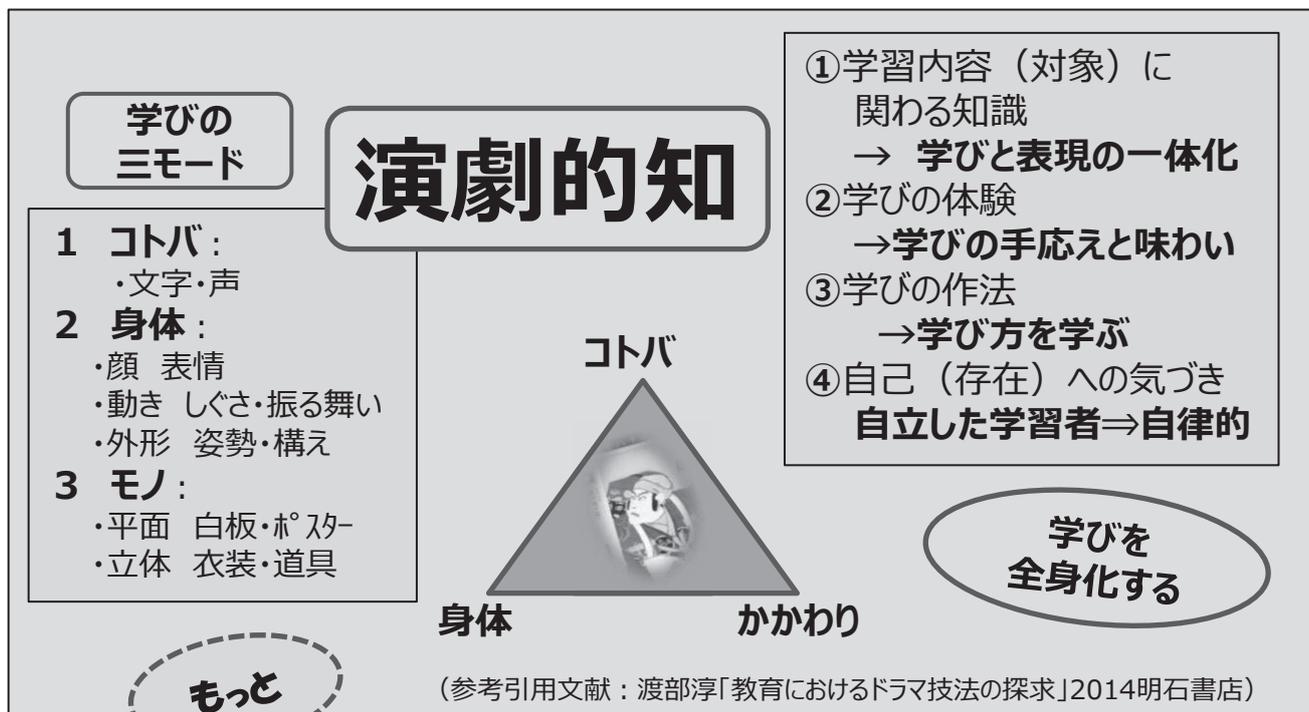
頭で考えるより、学びを全身化する体験をした参加者（教員・職員・学生・学習に関心のある地域の方々）等の多くの参加を期待する。

参考文献：

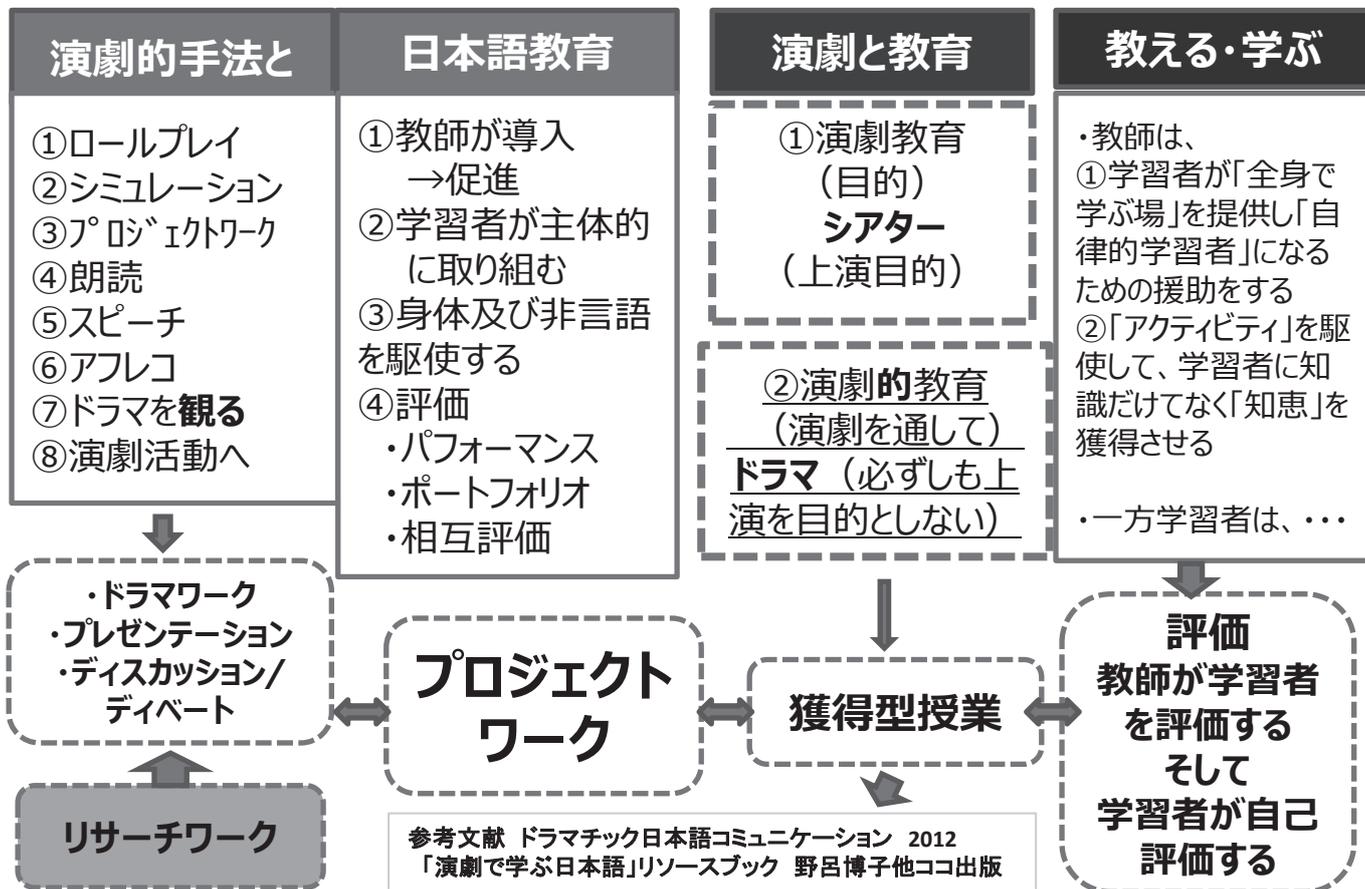
- ・竹内敏晴「からだ・演劇・教育」1989 岩波書店
- ・平田オリザ「対話のレッスン」2001
図書印刷株式会社

演 劇 的 知 と 教 育 コミュニケーション

G.三隅
20717
資料



＜演劇的知を教育コミュニケーションに取り入れる可能性を考える＞



ワークショップ